大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

第3章
レンヌ市とナント市における過渡期の都市計画：文化プロジェクトは都市空間の変容にどう貢献できるか

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大都市科学・防災研究センター 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Gangloff, Emmanuelle, 友谷, 知己 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000477

第３章

レンヌ市とナント市における過渡期の都市計画

–文化プロジェクトは都市空間の変容にどう貢献できるか–

Emmanuelle Gangloff（訳：友谷知己）

１　はじめに

本発表は、私の博士論文の一部から出発した内容となっている。博士論文のタイトルは« Quand la scénographie devient urbaine: Nantes comme observatoire des fonctions du scénographe dans la fabrique de la ville（舞台美術が都市美術となる時：まちづくりにおける美術家の役割の観測地点としてのナント市）»である。ナントを研究の中心テーマとしたのは、都市のセノグラフィ（舞台美術技法の都市への転用）がいかにまちの活性化に貢献し、どのように新しい公共空間の創出に寄与するのかを観察するためであった。この論文で、ナント国立建築大学、アンジェ大学にて学位を取得した。以来、様々な研究プログラムの枠組みで研究を続けているが、都市計画の領域と文化芸術の領域を結ぶことを常に考えている。

現在私は、主として国土整備、都市計画、そして文化のフィールドの研究者であるが、特に関心を持っているのが「まちづくり（la fabrique urbaine）」、そして都市の物語づくりで、この研究を SCAENA（文化の舞台、雰囲気、都市変容）という国立研究拠点にて行った。同時期の 2020 年から 2022 年にかけては、コロナ危機がまちづくりに及ぼした弊害についての研究（複数省庁を横断する国家機関での調査となる）も行なっている。また私は、ナント大学、特にナント建築大学、グルノーブル大学、ナント・デザイン大学にて教鞭をとっている。そして、共同で設立した「まちの財産（Bien Urbaines）」というアトリエでは、様々な実験的・学問的活動も展開している。

２　フランスにおける「過渡期の都市計画」台頭の背景

今回の発表の目的は、ナントとレンヌにおける個別の事例から、都市計画の新しい実践の形をいくつか報告することにある。ただ、いわゆる「過渡期の都市計画（urbanisme transitoire）」が台頭したのは、より広く、フランス全土での状況に由来するものである。まず、時限的な芸術活動を公共空間で展開しようとする動きが大変伸長した。さらに、まちづくりに関わる一部の人々には公共空間をこれまでとは違ったやり方で作りたいという希望があった。こうして、「時限的」あるいは「過渡期の」と呼ばれる都市計画が、2010 年頃をさかいに多数生まれてきた。

ただ「過渡期の都市計画」というのは、「時限的な都市計画（urbanisme temporaire）」とははっきり異なったものである。過渡期という言葉には、通過の意味合いが込められているからだ。「時限的な都市計画」というとき、そこで強調されるのは、計画が永続的なものではないということである。またその試みが、イベントであるという側面、そして遊戯的である側面が、むしろ強調される[20]。「過渡期の都市計画」というのは、遊休地で展開される一時的な複数のプロジェクトを指し示している。そのプロジェクト群は、本格的な事業自体がまだ着手されていない、なんらかの都市計画の一環なのである。ジュリエット・ピナール（Juliette Pinard）とエレーヌ・モルトー（Hélène Morteau）は「過渡期の都市計画に込められている野心とは、変わろうとするなんらかの場所の変容を開始することである。そして、都市計画の新たな実践例を先駆的にテストしてみることで、都市計画活動の将来的な姿を描き出すことである」[21]と述べている。

2-1　発展の様々な要因

過渡期の都市計画が台頭し、また発展したことには、複数の要因があった。アーティスト、文化活動従事者、まちづくりの担い手、これらの人々の活動

---

[20] Gravari-Barbas, Jacquot, 2007 ; Matthey, 2016.
[21] Pinard, Morteau, 2019.

の仕方が変化してきたことがその背景にある。ここではその詳細には触れないが、1970 年代頃から大きな変化があった。単に一時的にことを運べばよいという考え方から、都市を作り上げることを念頭においたプロジェクトへと力強く志向するようになった。

スライド 1　発展の様々な要因

2-2　都市のただなかのイベント–路上芸術の誕生

1968 年の 5 月革命以降、フランスでは路上芸術というものが発展する。アーティストたちは劇場から抜け出してパフォーマンスを見せ、公共空間に入り込んでいった。彼らはより多くの聴衆に触れようとし、市民との距離を縮めようとした。

1980 年代に入ると、こうした演劇形態の重要性はますます高まった。一時的な路上での作品にもいくつも傑作が生まれるようになったからである。イベントの間、すなわち路上でスペクタクルが展開されている間、観客が都市に向ける眼差しは全く別物となる。こうして都市を劇場に見立てる、都市のセノグラフィという考え方が生まれてくる。いわゆる造形芸術家たちも

また、アトリエから外に出て、都市を芸術創造の媒体とするようになる。社会学者のフィリップ・ショードワール（Philippe Chaudoir）は次のように言っている。「路上芸術家たちが都市空間に据え付けるのは、驚きであり、娯楽であり、詩である」[22]。

スライド 2　都市のただなかのイベント–路上芸術の誕生

2-3　創造的都市・イベント都市の発展

次第に複数の都市が、例えばナントはその一つであるが、自ら進んで芸術的活動のプランを提案するようになる。2000 年代になると大都市はすべて、アーティストの存在が地域にとってどれほど潜在的な力を持っているかを理解するようになった。そして大都市は、芸術家に対して次第に働きかけを強め、都市の活動の様々な側面（福祉的側面、イベント力という側面、芸術性という側面）の価値を高めようとする。文化というものが、地域の経済的発展の梃子であると認識されるようになった。かくして多くの大都市が、さ

[22] Chaudoir, 2007.

びれた区域の活性化のために、クリエーター集団を誘致しようとするようになった。こうした現象については非常に多くの議論があり[23]、都市部でのジェントリフィケーションの悪影響に対する批判もあった。だが文化活動の推進というものを、都市開発のための単なる道具だと考えるべきではないと思う。文化活動の推進とは、文化享受者や市民たちに実験的な文化を提供するための基本原則なのだ[24]。

スライド 3　創造的都市・イベント都市の発展

2-4　一時性から都市・建築の新しい作り方へ

2000 年代には、都市再開発事業の大きな進展が見られた。遊休地の再活用が進み、大規模な都市計画が整備され、大都市の活性化が図られた。都市を芸術活動の舞台とするアーティストに加えて、市町村自体が、またその都市整備部門の職員たちがノウハウを蓄積していく。職員たちは様々な業務

[23] Florida, 2007.
[24] Landry, 2012.

を内部で共有し、公共空間のためのプログラムを練り、活性化に努めるようになる。都市計画の分野では、専門家たちが文化の領域との関係を深めることで都市の活性化の新たな手法に目を開いた。企画者（建築家と都市計画家のチーム）が新しい行動様式を率先して編み出した。2010 年代には、パトリック・ブーシャン（Patrick Bouchain）、モード・ル・フロシュ（Maud Le Floch）、ソフィ・リカール（Sophie Ricard）といった人々、また、« Yes We Camp »や「まちの基盤・舞台（Plateau Urbain）」といった集団が、建築とまちづくりの別のやり方を求める声を挙げていく。

こうした都市計画の当事者たちは、建築と都市の構想のための、新しい問いを次々と投げかけた。地域を変化させる計画にどのように住民を巻き込んでいくべきか。どうすれば公共空間をより良く作り、近隣住民の日常にうまく適応させることができるか。公共空間の均一化にはいかにして抗うか。「オーダーメード（好みに合わせ）」かつ「進化型（のちに手が入れやすい）」建築を進めることは可能か。

スライド 4　一時性から都市・建築の新しい作り方へ

3　ナントとレンヌの例

様々な都市が「過渡期の都市計画」を実験し、こうした問いかけへの解答を導き出そうと試みている。ここではナント市とレンヌ市の例をご紹介する。このふたつのまちを選んだ理由は、似通った都市で展開された過渡期の都市計画でありながら、市民と文化のつなげ方が大きく異なっていたからである。

スライド 5　ナントとレンヌの例

3-1 ナント市の事例

フランス西部に位置するナントは、31 万 5 千人の市民が住む、国内第 6 位の都市である。市内を通るロワール川は、大西洋にその流れを注いでいる。ナントは多くの点で、過渡期の都市計画の好事例と言える。文化芸術を通じた地域発展の面で、ナントはパイオニアである。1987 年の造船所閉鎖にともない、ナントは 1989 年の時点で路上劇団の「ロワイヤル・ド・リュクス (Royal de Luxe)」を迎え入れ、市内での芸術活動の活性化を図った。造船所

跡地は、中洲のナント島における広大な遊休地となっていたが、そこはアーティストたちの活動舞台となった。芸術祭「灯りをつけた町たち（Festival des Allumées）」や大きなパレードといったイベントがナント市を時限的に変貌させた

スライド 6　ナント市の事例

3-1-1　芸術から時限性へ

2000 年にはすでにナント市はアーティストたちと連携し、市内の芸術をより持続的なものにしようと試みていた。2007 年には「ナント島の機械仕掛けの人形たち（Les Machines de l'île）」がやって来て、都市計画「ナント島（Ile de Nantes）」のフェーズ 1 が始まった。また現代アートのビエンナーレである「河口（Estuaire）」もスタートする。これはその後の 6 年間、アーティストたちにロワール川河口を造形芸術作品の制作現場としてもらう企画であった。このプロジェクトから芸術祭「ナントへの旅（Le Voyage à Nantes）」が生まれる。2012 年以来、芸術を通じてナント市民に町を発見してもらっているフェスティバルである。

スライド 7　芸術から時限性へ

3-1-2　3 段階の発展過程

1990 年から 2000 年にかけては、アートの実験段階であった。ナント市を活動現場としたアーティストたちが、荒れ果てた区域に新しいイメージを与えていった。住民たちは、それまでは単なる港湾都市の空間だったものが別の顔を持つことを発見した。2000 年から 2010 年にかけては、制度化と持続化の段階であった。芸術家たちからナント市にバトンが渡され、市は様々な具体的な手法を学び、恒久的な設置も行われるようになった。2010 年以降は、「ナント独自のまちづくり[25]」の段階となった。ナント市はアートによって満たされ、ナント市の都市整備局はこれをうけて諸々の計画を立ち上げ、ナント市民をより深く関与させている。現在、様々な過渡期の都市計画が試されている。

[25] Gangloff, 2017.

スライド 8　3 段階の発展過程

3-1-3　Transfert プロジェクトの詳細

「転換（Transfert）」プロジェクトとは、こうした、「ナント独自の」まちづくりの一環である。Transfert はナント市の南に位置するルゼ市における、将来的な 200 ヘクタール規模の都市再開発エリアの中心にある 15 ヘクタールの更地の遊休地で企画された。

2018 年から 5 年間、« Pick Up Production »という民間非営利団体（アソシアシオン）がこの土地に陣取って、活動を展開している。2022 年 9 月には一般開放が終了し都市計画プロジェクト« Pirmil-les Isle »に場所を譲ることとなっている。Pick Up Production は、1999 年創設のナントの文化団体で、「最も多くの人々に文化を表現の場としてもらうこと」を理念として掲げている。Transfert を任される以前から、ナント市内中心部の時限的プロジェクトに参画していた団体である。

スライド 9　Transfert プロジェクトの詳細

3-1-4　Transfert 以前のイベントと空間利用の例

Pick Up Production は 2012 年から芸術祭 Le Voyage à Nantes の年間を通したプログラムに関わっていた。とりわけ画期的だったプロジェクトは 2014 年の夏の間ナントの旧刑務所を一時的に利用するというものだ。刑務所としての役目を終えた建物の転用工事が始まるまでの休眠期間が活用され、訪問者たちは 2 ヶ月間、刑務所の壁面に広がるストリート・アーティストたちの作品を見ることができた。この「過渡期の都市計画」を経ることで、Pick Up Production 内に都市計画に関して、専門家と素人との対話を通じてもっとまちづくりに関わってはどうかという声が起こる。こうしたナント市とのコラボレーションがあり、ルゼ市にあった旧食肉処理場の遊休地の一時利用がこの団体に任された。

スライド 10　Transfert 以前のイベントと空間利用の例

3-1-5　実験的文化芸術区域としての Transfert

Transfert というプロジェクトは 5 年間、市民と一緒になって、都市の新しい表現方法を模索する場所であった。Pick Up Production は検討作業のためのいくつかの方針を打ち出した。一に市民の関与である。来訪者、将来の使用者、すべての人にひらかれた表現空間を作り出す。二に実験場の設置。これは明日の都市のための新たな空間活用実験のため研究し活動することである。

プロジェクトはもうすぐ終了となるが、現段階での収穫を確認することができる。このプロジェクトは、文化と都市計画の領域の出会いを可能とするものであった。土地整備担当者は、このプロジェクトを通じて、空間の感覚的側面、また空間の雰囲気というものを、より良く認識することができた。さらにまた、利用者、来訪者、近隣住民がその場を自分のものとすることに配慮するようになった。しかし、限界もある。このプロジェクトを通して Pick Up Production は一般市民による都市空間利用を確かに推し進めることができた。しかしながら、この空間の先行き、いかに空間を構築していくか

ということについての対話を進めることは容易ではなかった。そもそもTransfert プロジェクトのチームは、「文化的都市計画（urbanisme culturel）」という言葉を好んで使っている。地域に対する文化プロジェクトの貢献がいかに大きいかという点を強調するためである。こうした文化からの貢献とは、単にまちになにかを建設すればよいということだけではない。それはより広く、都市改造の見え方、都市空間表現の進化、任意の土地にまつわる象徴性の継承、といったことに関わっている。これは私の希望であるが、Transfert プロジェクトはおそらく将来のまちのあり方について、空間の持つ雰囲気と独特の心地良さについての、ひとつの「音色（une tonalité ）」を示唆していると思われる。Transfert はまた、ひとつの物語を描いたプロジェクトでもある。その物語とは、空間のリアルな体験によって、はっきりと形をとるものである。

スライド 11　実験的文化芸術区域としての Transfert

３－２　レンヌ市の事例

レンヌはフランス西部の都市で、ブルターニュ地域圏の首府である。フランス第 11 位の都市で住民は 22 万人を数え、活発な大学都市として知られている。レンヌは非常にダイナミックな文化都市で、規模の大きな劇場やクリエーション・スペースを持つ。ブルターニュ国立劇場があり、とても重要な建築遺産のまちでもある。レンヌの芸術的活気とは多数の文化スペースがすでに存在している点にある。この点でナントとは違っている。ナントの芸術的活気とは、アートによる都市空間の占有があり、町のイベント化に由来するものである。

スライド 12　レンヌ市の事例

3-2-1　パスツール館プロジェクトの詳細

レンヌではパスツール館（l'Hôtel Pasteur）プロジェクトというものが始められた。パトリック・ブーシャン率いる建築家集団と、当時の市との合意のもとに始められたプロジェクトである。パスツール館というのは、レンヌ市

中心部に建つ優れた建築物である。1888 年、ジャン-バティスト・マルトゥノ（Jean-Baptiste Martenot）とエマニュエル・ル・レ（Emmanuel Le Ray）というふたりの建築家によって建てられた。1897 年にはレンヌ大学理系学部（faculté des Sciences）によって建物すべてが使用され、これが 1967 年まで続く。次いで 1969 年から 2018 年の間は代わって歯学部が使っていた。2013 年には当時の市長ダニエル・ドラヴォー（Daniel Delaveau）が音頭をとって、未使用の建物部分を「屋外大学（Université Foraine）」プロジェクトに譲ることとなった。このプロジェクトは、建築家兼セノグラファー（都市演出家）のブーシャンと民間非営利団体「われらの共同アトリエ（Notre Atelier Commun）」とが立ち上げたものであった。

当時レンヌ市はパスツール館にかかる経費を節約しようとしており、管理費が浮かせられることが好都合であった。パスツール館の未使用空間は、レンヌのただ中にある理想的な実験場となった。ブーシャンたちのチームは、建築学における「計画しない（non-programme）」という概念を考え、使われない建築遺産利用という占有の問題に取り組もうとしていたのである。

スライド 13　パスツール館プロジェクトの詳細

3-2-2　建築的恒久性

パスツール館の計画が具体化したのは、「建築的恒久性（permanence architecturale）」[26]という概念を通してであった。これは何か変化を加えようとしている任意の場所に、なんらかの構造物を継続的に置いてみる、という考え方である。この概念によって、プロジェクトのすべての当事者の間では意味ある対話が可能となるし、建築学的アプローチの質も保証される。「建築的恒久性」というのは、学問的ツールのひとつであり、またひとつの心の持ちようでもある。プロジェクトの共同主催者である建築家ソフィー・リカール（Sophie Ricard）はこのように述べている。「全面的な信頼のもとすべての人に開かれるこのプロジェクトには、事前に定義した計画は一切なく、それ自体、一種の賭けだと言える。レンヌ市長にとってもそうだし、こんなことを思いついた建築家にとってもそうだ」[27]。

スライド 14　建築的恒久性

[26] Manifeste de la permanence architecturale, 2016.
[27] Sophie Ricard, in Encore Heureux, *Lieux infinis, infinite places*, 2018, p.157.

3-2-3　新たな必要を定義するため住人に開かれたプログラム

このプロジェクトの目的は、実験的・新規的アプローチを開始してパスツール館の今後の使い方とあり方を考えようとすることにあった。スタート時にリカールは、「現地管理者」となることを約束させられた。それはつまりパスツール館の建築的恒久性を保証し、一般市民に開放する役を担った管理人ということだ。このプロジェクトの当事者たちは、こうも述べた。「パスツール館は屋根のある公共空間である」[28]。

合議制の団体がこのプロジェクトの柱となった。パスツール館に関するすべての決定は、すべての当事者たち（館の使用者やプロジェクト関係者）の間の集団合議にてなされたのだ。その 5 年の時限的占有期間にどれだけのことがなされたか、いくつかの面白い数値を提示する。

- 在留希望者に無料フランス語講座が 188 時間提供された。
- 開館日は年 365 日であった。
- 年平均で 300 件のプロジェクトが受け入れられた（プロジェクト期間は 1 時間から 3 ケ月まで）。
- 年平均で 250 の団体が受け入れられた。
- 鍵は 1 つだが、これが 5 年間で一回もなくなることはなかった。

2015 年、パスツール館プロジェクトは次の段階に入り、建築コンクールが始められた。プログラムには歯学部のための学校と施設などが含まれつつ、「プロジェクト館（Hôtel à projets）」として存続することが決定された。最終的な改装までは、市民社会による新しい使い方にもプロジェクトにも門戸を開いていくこととなったのだ。こうした過渡期のプロジェクトは 2018 年でひとまず終了した。このようにして、パスツール館は「プロジェクト館」という名称のもと今日も開放され、様々な活動、様々な学問分野の実験を受け入れている。規約と集団合議性のチームによるシェア型のガバナンスによって、その運営方針の微調整が施されている。

---

[28] https://www.hotelpasteur.fr/a-propos

スライド 15　新たな必要を定義するため住人に開かれたプログラム

3-2-4　レンヌのプロジェクトの教訓と限界

ナントの Transfert プロジェクトのように、パスツール館における過渡期の都市計画は 5 年間、2018 年まで継続した。最終的なプロジェクトを待つまでの時限的空間利用の効用に関しては、進行中のナントとは違って、終了したレンヌの例の方が考察する時間の幅がある。レンヌの場合、未使用空間をローコストで使いたいということがプロジェクトを動かしたもともとの要因であった。ある未使用空間を利用して実験を試み、建物の未来について新しい基軸を出す、というのがその趣旨である。プロジェクトを牽引した関係者たちは多方面の人々で、それが持続的な効果をもたらした。恒常的なプロジェクトが成立したのは、明らかに時限的・過渡的アプローチが功を奏したからである。

2 つのポイントを押さえておきたい。一つはパスツール館をめぐる最終的都市計画には、進化があったという点だ。建物を「プロジェクト館」として生かすという、新しい建築学的計画が見られた。次に、都市整備局の支援を受けた持続可能なシェア型のガバナンスが新たに生まれたという点である。

同時にいくつかの限界も指摘できる。パスツール館プロジェクトは、実験的な性質のものであったが、関係者たちの極めて高い参加度に支えられた。この種のプロジェクトが機能するには、運営チームには多くの時間を割くことが求められる。また非常に優れた仲介者も必要となる。つまり、成功の鍵となるのは時として、プロジェクト従事者たちが全面的に参加し関与できるか否かにかかってしまう。こうした、当事者の時間を奪ってしまう側面は、都市計画に一種の脆弱さをもたらす。だが同時に、こうした人間次第という要素はまた、集団のダイナミズムを生み出し、やる気のみなもとになるとも言えよう。

4　プロジェクトの教訓と限界：都市計画の新たな手法へ向けて

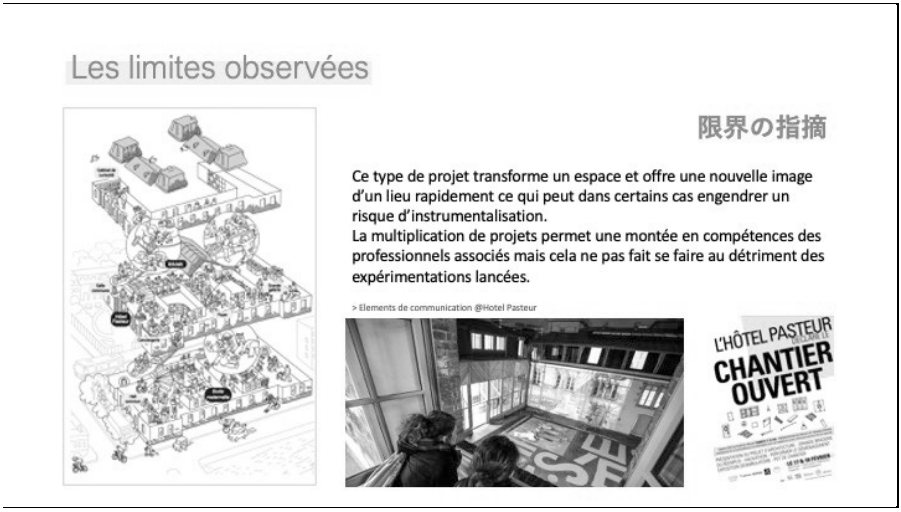
ここまで都市計画の新しい実践を模索したプロジェクトを見てきた。過渡期の都市計画というセクターは、徐々にプロ化・職業化していこうとしている[29]。フランスでは、コロナ危機によって公共空間での大規模イベントの実施が不可能となったことから、公共機関によるこの種の都市計画が待望されるようになった。こうした要求を持つ市民とは、自分たちの生活環境の改善と変容に、なんらかの貢献をしたいと考えている人々であろう。ある種の自治体では、例えばグルノーブルがそうであるが、市民を関与させる都市計画（urbanisme tactique）、あるいは過渡期の都市計画に携わる人材を進んで雇用しようとし始めている。実際こうした都市計画には、専門知識を持つ人間が必要であり、大都市ではプロジェクト従事者のバトンの受け手が求められている（地域住民から発した都市計画の場合は特にそうである）。そして本日のいくつかの事例は、都市計画においては、複雑な都市の時空を管理しまた活性化せねばならぬことを、われわれに教えてくれる。建物の休眠期間とは、まさに都市計画を構成する「時間」そのものである。空間は、新たな使用に供されていくのだ。

---

[29] Pinard et Morteau, 2018.

4-1　限界の指摘

このように都市計画は、迅速に空間を変貌させ、迅速にある場所の新しいイメージを作り出す。このためある種の人々は、過渡期の都市計画を使って、来るべき都市の変貌を無理に「飲み込ませ」てしまおうかと考えるかも知れない。だが過渡期の都市計画は、話し合いの上でなにかプロジェクトにたどり着けなかった場合の、その場しのぎの「弥縫策」として用いられてはならない。一方で、過渡期の都市計画を扱う部門が専門職となろうとしていることは、良い知らせである。関連して総合的に知識の積み上げがなされている。だがそれによって、立ち上がったプロジェクトの実験精神や特殊性が損なわれるということがあってはならない。



スライド 16　限界の指摘

5　結論

結論を述べよう。過渡期の都市計画は、まちづくりに市民を巻き込む新たな可能性を提供するものである。予測不能の部分を残しておく、絆を形成し

ながら動く、こうした方向性によって住民たちは自分たちの生活環境の範囲で参画できるようになる。しかもコロナ危機をはじめ、問題は山積している。社会問題、経済問題、さらに環境問題など。今後わたしたちはみな、不断に状況に適合し、不断にまちづくりの手法を調整し、共に生きる方策を再創造していかねばならない。こうした大きな課題をみなで共有しながら、短期的な、移行期の、また未来の居住空間としての都市を考えていかねばならないのではないだろうか。

〔参照文献〕

Bouchain Patrick, Construire autrement, Actes Sud, 2006

Chaudoir Philippe, La ville événementielle : temps de l'éphémère et espace festif, Géocarrefour, 2007

Collectif, Lieux infinis, infinite places, construire des bâtiments ou des lieux ? Institut Français, B42, 2018

Florida Richard, The rise of a creative class, revisited, Basic books,2012

Gangloff Emmanuelle, Quand la scénographie devient urbaine, Nantes comme cas exploratoire des fonctions de la scénographie, Université d'Angers, 2017

Gravari-Barbas Maria et Jacquot Sébastien « L'événement, outil de légitimation de projets urbains : l'instrumentalisation des espaces et des temporalités événementiels à Lille et Gênes », Géocarrefour, Vol. 82/3 | 2007

La permanence architecturale, Cahiers Hyperville, 2016, https://lapreuvepar7.fr/wp-content/uploads/2019/10/Hyperville_ActesPermanenceArchitecturale_WEB.pdf

Landry Charles, the creative city a toolkit for urban innovators, 2007 (1995)

Matthey, Laurent. « Gouverner par l'évènement. Quand l'action sur la ville s'empare de la critique artiste », L'Observatoire, vol. 48, no. 2, 2016, pp. 87-90.

Morteau Hélène, Pinard Juliette, Professionnels de l'occupation temporaire, nouveaux acteurs de la fabrique de la ville ? Du renouvellement des méthodes en urbanisme à l'émergence de nouveaux métiers, RIURBA, 2018

Ricard Sophie, interview Les temps de l'urbanisme durable, Revue sur Mesure, http ://www.revuesurmesure.fr/issues/battre-aux-rythmes-de-la-ville/sophie-ricard-les-

temps-de-l-urbanisme-durable, 2021